

～ 発達特性のある若者の社会的自立に対する支援者の役割を考える ～

- 進行役：NPO法人リンケージ理事長 石川京子氏（写真右）
- 助言者：みどりクリニック院長 鈴木基司氏（写真下 右端）
- 登壇者：NPO法人HOME理事長 高橋繁樹氏（同 左端）
群馬県発達障害者支援センター次長 桑原友美氏（同 中）



<社会的自立へのステップ、どんな支援が必要か>

石川 今日のテーマは「社会的自立」です。

社会的自立に向けて、どんなステップを子どもたちは踏んでいくのか。どんな支援が必要なのか。

その中で「自己認知」とは何か、自己認知というのは何だろうと思って調べたら、自分の強みだとか、弱みだとか、価値観、物事の考え方、捉え方、こういったことを指すそうです。

そういった「自己認知」の支援というのが、社会的自立に向けて必要なのか。こういったことも、先生方のご経験から率直なご意見としていただきたいと思います。

最初の質問は、社会的自立に向けて子どもたちはどんなステップを歩いて行って、私たち大人はそれを支援していけるのか。その際に、自己認知、自分のことを知るといふ支援は、必要なのか、どんなプロセスで必要になってくるのか。そんなことをお伺いしたいと思います。

高橋 私たちが関わっている方は、ほとんどが大人になります。

実際、働く力を比較的好持ちだったり、学歴も大学を卒業されたりという方も多いのです。ただ、やっぱりそういう中でも就職に結びつかない、本人のできることに認識も高いけど就職に結びつかないというケースがすごく多くて、面談だったり聞き取りで情報を整理していくと、やっぱり社会生活力、その経験値の偏りとか乏しさ、青年期に集団での行動も避けてきていたりしている。

例えば、学校は行っていただけで直行直帰。ある程度偏っている。限定されている生活の中で成り立っていたことが、年齢のステージが上がることによって、特に就職というステージに上がることによって、この生活圏内が広がることでちょっと見えてくるということが多くあるんですね。

私たちがよくやっている生活訓練の中だと、本当にびっくりするんですけど、図書カード1枚も作れない人が多いんですよ。大学を卒業しているんですよ。だけど、図書カードの作り方がわからない。ATMでのお金の振り込み方、引き出し方がわからない。そういった方が多くいらっしゃいます。

だから、幼少期・青年期にいろんな経験・体験をさせてあげるといふことを蓄積されて、そうしたことを積み重ねてあげるといふことが大切なのかな。それが自分の形やスタイルを作って、結果として選択していくこ

との幅が広がる。そういったことに繋がるんじゃないかなと思います。

桑原 大多数の方は、いろんな経験をされて、暗黙の了解、裏の部分までわかって社会的な常識、ルールを学べてきているでしょうけれども、たぶん発達特性のある方は、育っていく中で、特にそういうところがわからないので、わからないまま日々の生活や学校生活を送っている。ルールが多い学校生活を何とかやっているけれども、実は苦勞している。勉強はわかり、できて知的能力も高いと、苦勞していることが見えないから、そのまま成長していくのかなと思います。取り残されてしまっていると思います。

例えば大学に行ったときに、いろんな選択を自分でしなくてはいけない、授業選択、履修科目とか。そこでわからないことが出てきてしまう。就職になると自分で決めることもいっぱいあって、学校生活ではある程度決められたルール、路線というか、レールがあってその中で選択すればいい、限られた中ではうまくやってきたけれども、一般社会に入ってわからなくなってしまうということもあるのかなと思います。

経験ができなかったこともあり、気づかないまま上手くいってきた人が、大人になってから、ある時期になると困って支援センターにくるのだらうかなと思います。うまくやっているようだけど実は特性があって、苦勞しているかもしれない、見えてないかもしれない。そういう片鱗にどこかで気づければ、体験をするとか理屈を教わるといふことに繋がり、後の生活にすごく助けになることになるのかと、大人を支援していると思うことがあります。

ただ本人の受け取る力も弱いかもしれず、本人の力にもよるでしょうし、その時の環境にもよるとも思います。そういった視点を持ちながら、その人に向き合ってみることが必要だと思います。

本人が選択するのが難しい場合は、ご自身の今の位置を考えて、次に行くときにはどうするのか、そういうステップを一緒に考えてみるようにしています。

ただ、ステップをある程度決めても、すぐに就職したいとか、気持ちがはやってしまうと、どうしてもステップを飛び越えてしまいたくなる気持ちが出てきて飛びついてしまって、失敗してしまうこともあります。

実行力、行動力のある方も多いので、面接の時はこういうステップにしましょうねと言っても、先のことをどうなっていますかと聞かれます。今はこの位置だからねと言って、振り返りながら、少しずつやりましょうとステップを踏むこともあります。

ステップというのは、いろんな意味があると思います。

石川 鈴木先生、ご助言も含め、2人にぜひ聞いてみたいことがありましたら、お願いいたします。

鈴木 高橋さんの話を聞いて、十分に時間をかけきっちりと向き合っていてすごいなと思いました。医療はそんなには時間を取れずに診断ということをどこかでします。お薬を使うにしても、社会的な制度を利用するに当たっては、診断をつけることは必要なのです。ただ、まかり間違うとレッテル貼りみたいになってしまう面もあって、限られた時間でするわけですから、できるだけその人を巡る情報を多次元から集めるよう努力・工夫はしています。でも、通常の臨床の中では時間的にも、情報源においても限界があります。

私自身、一人では限度があるので心理師と連携したりして情報を得るようにしています。そうした意味で、皆さんの話は私にとって胸にしみる、具体的な話で、すごいなと最初に感じさせられました。

医療の中で、私としては特性の問題も含めてどのように見て対応しているかと考えてみます。我々がその人に出会う時は、その人がある程度の年齢になっているわけです。就労となればもう15歳を超えて、義務教育期を終えている方々です。その時にその人固有の特性の診断・評価がもちろん大事なのですが、今までの話の中にもありましたが、環境や周りの人との関係の中で体験が積み重なっている。積み重なっていて、その

人の、ある意味での人格が形成されて来ているわけです。

特性そのものに加えさまざまな関係体験が蓄積している方々なわけです。その時に何が重要かという、我々は小学校、中学校時代にそういう一対一的な対応をきっちり受けながら育てられてきたかということでもないわけです。単純に言うと、1人の先生が何十人というシステムの中で教えられ、育てられてきたわけです。しかも同年の集団ですから、例えば、年齢が違えばすごい先輩だとか距離がとれますが、同年の集団で比較され易いような条件の中、学校の場合だと主として学力・勉強、社会に出ると仕事上の効率という人間関係の取り方も含めた生産性というか、外からの評価に曝されて生きて来るわけです。特性が絡んだ困難がある場合には、そこでマイナスな体験というか自分が否定される体験を繰り返し易くなり、結果的に自己肯定感が得にくく、「不全感」を抱え込まざるをえないことになりがちです。

以前に比べれば、重いレベルの人は比較的早くわかってもらい易いわけです。それはそれで、重いレベル故の対応上の困難さがありますが、この子はここまでやるのは難しそうと「このペースでいいよ」と、その子に合わせた対応、例えば知的能力における中～重度の方には支援的対応がなされた歴史(特殊学級)があります。それから、やりとりにおける苦手さの最も難しいレベルでは、旧来の狭い意味での自閉症、今は重いレベルの自閉スペクトラム症です。この子は同年のみんなと一緒に動きは困難だろうなということで、支援的な視点を持ってもらい易いというか、そうした対応を周囲が納得し易い、例えば「甘やかし」とは否定され難い。

でも、知的能力でもやりとり能力においても重いレベルの方々は少ないわけですし、どのような特性、属性であっても程度の問題があるはずで、属性の指標・基準が妥当であるならば凡そ正規分布するわけで重い人は少なく、微妙な、軽度～境界域レベルの方々が圧倒的に多いわけです。そのような場合、日常生活や好きな領域は通常通りにできてしまう面を持ちます。例えば、ADHD特性で多動や衝動性が高く周囲と衝突すると、比較的早くわかってもらえる時代になりました。

旧来的には、しつけの問題とか我がまま、やる気の問題と考え、いかに抑えるかという、一人の先生が何十人も見ていたら厳しく叱責して対処しました。本人にしてみるとトラウマの連続、本人は、ついそういう行動をとってしまったという流れですから。よく、ご家族や先生に話すのですけれど、「おねしょを怒られるようなものですよ」と、おねしょを怒られても本人はどうにもできません。すると、やがては隠すとか、してないと嘘をつくとか、いろいろな防衛機制が出て来たり、不安が生じたりもします。

ただ、多動があまり目立たない注意欠如優位系のADHDの方もいるわけです。女性の方が多いですけれど、男性でもおとなしい方もいるわけです。そうすると、一見、集団行動には収まって、やっていけそうに見えますから、「何でちゃんとやれないの」「ちゃんと話を聞いてない、上の空のように見える」「やる気あるのか」というふうな感じで対応されて来てしまう。時に、人格を否定される、「それじゃあ生きていけないぞ」等・・・。

自閉スペクトラム症でも受動型というか受け身的な人もいます。ADHDの多動と重なっている方は早めに難しくなるので早く対応せざるをえないのですけれど、中等度でも受動型の方は中学生ぐらいまで全然問題なく「適応」的にやっている人もいらっしゃいます。

高校生くらいで、勉強ができたりすると進学系の高校に入ったり、大学に進学したりできる。そうした場合、出会う時は特性故の問題というより、特性を主たる要因というより本人の生き難さ、不本意な体験の繰り返し故に二次的な障害(不安うつ状態)が前面に出ていたりします。

最近一般化されてきている概念で複雑性PTSD様の病態、その人にとってはトラウマ(不本意感)の連続ですから。幼少期から繰り返されると、元々の特性がすごく助長された状態でその人に出会うことになります。そこでパッと診断していいのか、と私は感じていたりもします。

さらに、ADHD特性が併存していると、ADHDには有用性の高いお薬が登場していますので、それを用いる、使わざるをえない、医療としては使ってみます。学業で良い結果をもたらす可能性は高いです。

そうすると結構難しい大学までクリアしちゃうのです。でも就職とかになった段階で仲間関係とか、就職

先での上司との関係で難しさが生じてしまいます。そういう人にしてみると、ものすごく落ち込んでいますから、まず繋がりを持っていくことにも難しい事態が起こってくるわけです。学校では設定された課題をこなす事で良い結果を出すと一目置かれたりしますが、就職となると先ほどの話のような事態が生じがちです。

皆さま方のところでは、よく来てくれたねというところからとお聞きします。でも「辛い」と言い過ぎかもしれませんが、辛いも、場合によっては自分が馬鹿にされたと思ってしまうかもしれません。つまり、ネガティブな体験を繰り返していると、やはり扁桃体に人間関係に於ける不安・不本意体験がしっかりと記名されていく中で、被害的にとらえる認知（捉え方）が起き易くなっているということもあります。

そこはすごく時間をかけてつき合うというか、本人にとって、この人、自分のことわかってくれると思う関係を作りながら徐々に進めていきます。でも、就労移行支援が2年という限定があり、1年余ぐらいで結果を出さねばという、そこに関わる側の切迫感も出てきてしまうと、速やかに結果を出したいと考えてしまいます。

それが自分のやりがいなり評価にも繋がるという一面とも、場合によってはオーバーラップして難しい対応、不安を増強させてしまいかねないかなということに常に気にしています。皆さんの話を聞いて、すごくそのところをクリアなさっていて、丁寧に時間かけてやってくださっているなあということを感じました。

自己認知の支援をどのように行っていくのかという事ですが、そういう関係作りの中でやっていくしかないのであろうと思います。不安の強い人には一人の人が二役をすると無理ですよと常々話しています。一人二役すると不信感をかうのですよね。言っていることが違うとか、俺にやるようにと言っているのか、無理しなくていいよって言っているのか、どっちなんだみたいなことになってしまいかねません。

やはりそこでは連携するというか、役割を少し意識した連携を対応する側で常に作っていきます。徐々に信頼関係が確立されてきて、この人は大丈夫と思ってもらえるようになれば一人二役でも良いかもしれません。もう少しできないかなと提案しながら、無理なら言ってきて、相談していいよとか・・・でも、最初は、それは別の先生にフォローしてもらったり、別のスタッフに伝えてもらったりという態勢作りです。

そのような態勢まで含めて考えていく中で、だんだんと自己認知が無理なくできていく、これは人によっては相当時間がかかるはずであると感じさせられています。

石川 皆様からのお話は、本当にじっくりもう少し時間をかけて、ちゃんとか自分の中で消化していきたいなと思いました。鈴木先生のおっしゃる通りです。

その中で、高橋さんと桑原さんのお二人に、今このステップに向けた支援について、何か具体的にお聞きになりたいことはありますか

鈴木 拝聴した流れで納得です。すごく工夫して、いろいろな時間、その人に合った取り方とか。私の経験でもその子は、高校は夜間に入学となり負担が取れたのですが、実は親御さんは夜間には反対していました。

でも、朝が苦手というか、元々朝が苦手？私も苦手な方で、わかるのですが、そこで何が重なるか。学校に行って「またいやな事になるのじゃないか」と予期不安が頭の中に湧いた途端に、ますます起きられなくなるわけです。ならば夕方からの動きの方がうまくいくかと考え、説得まではしませんでした。親御さんにもそういう提案をしました。夜間定時制入学で登校し易くなり十分やっていけるという方も以前に経験していますので、その人のペース、特性だけではなく体質とかにもあった対応はあるのだろうと推測しています。

後は、発達障害者支援センターの先生のお話ですが、コロナの関係でか？一時利用者数が落ちましたよね。落ちた後にまた上がってきていますが、落ちた分はちょうど小・中学生までが占めていて、その方々の落ちている分はそのまま、増加に繋がっているのかなと思いました。そういう点で考えると、小中学校・高校から社会へ、を見据えた繋がりは、どこかにあった方がいいのだろうなあと思いました。県の予算がついて来る事

は、なかなか難しいのかな、と感じていますが。すみません、勝手なことを言いました。

桑原 実際、来所での対応なので、そこに至るまでの経過を全部調べるのは難しいです。実際に来ている人の統計になっているので、先生が指摘された視点は持っていないのが現状です。

支援者である皆さんが幼児期から小・中と支援をしていただいているので、大人の方が多いのは、幼いところからの支援を受けず、発達障害の観点を持たずにきている大人の人が多いのかなと思うところはあります。

今後、支援を受けてきた方々がどうなっていくのか、ちょっとわからないですけれども。

基本的に小・中学生の方は市町村での支援とか、児童相談所にご案内しているので、積極的には引き受けていないところもあります。

最近、高校生や大学生ぐらいの方の、その先を見据えた、相談が入ってきているので、今後どうなるかなと思います。

鈴木 わかりました。それと、支援センターの支所はできないものでしょうか、やはり、県1ヶ所ということになっていると利用する側に制限が生じやすいですね。県内にせめて三、四ヶ所あるといいなと思います。

桑原 そうですね、利用者、相談者の方にセンターは遠くてと言われ、児童相談所は4ヶ所あるのに何でないんだって言われたことはありますけれども、今のところそういう話は聞いていません。

基本的に支援センターは直接相談を受けていますけれども、間接支援ということで、市町村や相談支援事業所などの困難ケースをバックアップする形で対応していきます。皆さん方も支援する力をつけていただいていると思うので、そちらの活動を支援する、その方向で充実できるように取り組み始めているところです。

<自己認知の支援とは>

石川 高橋さんからは、社会生活上の経験の乏しさや偏りがあるという話がありました。それによって、働くという段階において、困難を抱えやすいこともあるから、丁寧に、丁寧にそのあたり、本人ができる形にして、それを習慣化していくようにしていく支援、こういったこともステップも教えていただきました。

桑原さんからは、どうも今までうまくいっちゃって、するっと来たような方もいらっしやると。

でもその時に発達の視点というものを私たちが持って相談に当たっていくということも、とても大事なのではないかとご示唆もいただいたかと思います。

鈴木先生からは、皆さんもご存知の通り、幼児期にとっても傷つきを重ね、重ね、重ねて成長された方もたくさんいらっしやいます。その途中で、一对一の丁寧な支援を受けてきた方ばかりではないかと思います。

そういった意味でも、一对一で支援をしていくという必要性も、ご示唆いただいたかと思います。

おそらく、小さい頃に失敗体験ばかりで、傷ついてばかりいたら、自分というものをどうとらえていくんだろうか。自分というものを「好き」でいてくれているんだろうか、そんなこともちょっと気になってしまうところです。

もう一つ、支援協議会からいただいているのがその自己認知に関してです。

ご自身の何らかの発達特性に気が付いている方ばかりではありません。

先ほどの坂爪さんのお話の中でも、そのジョブマッチングというお話があったかと思います。周りから見たら、いや、あなたはその仕事よりも、こういった仕事の方が向いているんじゃないかな。

そんなふうに思われて、自分のことを知りましょう、自分の特性のことを知る、そういった支援が必要なんじゃないか。そんなことをお気づきになられている先生方、支援者の方も多いと思います。

自己認知、自分の強みや弱み、価値観、こういったものを知っていくためのアプローチの仕方、支援の仕方、先ほど鈴木先生からは、丁寧に一人一人に向き合っていくのが、その力を伸ばすよという示唆をいただきました。

高橋さん、桑原さん、この辺りをご自身の経験の中から、まだまだ自分のことに気づいていない。私たちも含めてですが、多くの私達に、周囲の人はどんなふうに関わっていけるのか、ご経験の中から何かヒントのようなものをいただければと思います。よろしくお願いします。

高橋 自分が関わっている中で、よく障害福祉サービスの方でご利用していただくケースの中でお話をさせていただくと。自己肯定感がそもそも低すぎて正しい判断がちゃんとできていないような状況の方だったり、いろいろな失敗経験やいろいろな経験を積み重ね過ぎてしまって、こんがらがっちゃっている方が多くいらっしゃいます。

私たちがこういうことやっているなど思ったのは、やっぱり一番最初に、複数の職員で関わるのではなくて特定の職員で、関わりながら聞き取りをさせてもらいながら、今までの生い立ちから含めて、自分の整理をしていくような形をとりながら、その施設の強みとしては、実体験、活動ができるので、その活動を通してできていることは「しっかりできてますよ」ということを言葉に出して伝えていくというようにしています。

そういったことの中から、本人の自己肯定感をしっかり正しい位置に把握させていくような形を取り組んでいくような形をとっているのかなと思います。

その中で、いろんな得意なことや、苦手なこと。そういった判断を一緒に考えて確認していく、また整理を行っている形をとっているのかなあと、先ほどの話を聞きながら感じました。

桑原 センターには、自分にちょっと何かあるのかな、失敗などから特性があるのかもと思っていらっしゃいます。ちょっと気になった方にはネーミング的に敷居が高いかもしれません。

でも来てくだされば私たちは繋がれるように支援し、特性を理解するために生育歴をしっかり聞いて、特性をフィードバックするという形での関わりをします。

成育歴を聞くことで全部を理解できるわけではなく、本人からの言葉だけではなく、第三者的な視点も入れるようにします。ご本人が困ったとりか、パニックじゃないけどちょっと固まったりとか、なんか困難を抱えているかなと思える行動とか仕草とか、言っていることがちょっとずれちゃっているかなと思ったときに特性の視点から気づいて、よい関わりをしていくことが必要だと思います。苦手さからわかりやすい方法に切り替える、限局性学習症（学習障害）で飛ばし読みをしてしまう場合に定規をあてると読み易くなるように、工夫をすればうまくできることがあるので、自己認知は悪い方ではなく、うまくできる視点、特性のいい点を活かしていただきたいです。過集中しすぎは悪い面ととらえられるけれども、集中力があることなので、良い面を活かしていく。

特性は、いいところ得意な部分と不得意な部分という表裏一体と思うので、そういう片鱗が見えたら、いいところを見つけ、特性をうまく使って、うまくいくことを重ねて本人の理解が進むと、よりよいのではないかなと思います。

実際にできているかというところですが、そんなふうに感じます。

石川 鈴木先生、今のお2人のお話を聞いていただいて、何かご助言ご感想ありますか。

鈴木 そうですね、自己認知の支援と括っていますけれど、慎重にいくしかないだろうと考えます。

そこで、特にADHD特性系は、少し話は進め易い面を日常診療の中では感じています。自閉スペクトラム系は境界域も含めて、まさにスペクトラムです。ADHDもちろんスペクトラムですし、知能もスペクトラムですね。程度問題となるとカテゴリーで括っても、どちらとも言えない境界域があるわけです。

例えば、IQが70を割っていれば知的発達症ということになるけれども、70、71は何でもないのかと言うと、そのようなことはないわけです。その辺の微妙なところがあるだけに慎重にいくべきだと思っています。まして、いろいろな逆境体験が積み重なっている中で、特性の程度が増強されているという一面もありますし、それから、専門家の中でも議論になってしまうのですが、ADHD特性があると、これはシングルフォーカスになり易いという意味では、自閉系の方の拘りはより強い拘りとして表出し易い、拘りが大変強いというふうに判断されてしまいがちです。すると自閉スペクトラム症の診断に繋がり易いような流れもあると思います。特性概念はバイオマーカーがない診断だけに、信頼関係を作りながら慎重にいくべきだと思っています。

ただ、時間をかけてと申しましたが、この診断でこの薬が使える、支援制度が利用できる、あるいは、情緒特別支援が保障され易い、周囲が納得できるとか、そうした場合、診断する事に意味があります。この辺りを意識しながら、認知に繋げていく、最低限、親御さんやその子に関わる方には早めに伝えていきます。

本人に伝える時期というのは、やはりタイミングを考えながらというのが大原則だと思っています。一般論としては、あまり性急に話さないほうが良いように感じています。

それと本人を連れてくる時には、私は開業医ですので予約の電話をもらった時に、なるべく私が出るような形で時間を限定して電話を取っています。本人を連れて来るにあたって、本人の困りを少し引き出しながら、特にADHD系の子の場合、怒られたり、厳しく先生に言われたりしている中で繋がって来る方が少ないので、その延長で連れて来られたというふうにならないように、少し意識しておいて下さいと頼みます。

自分も困っちゃうよね、お母さんもどうしようか、相談に行こうかという流れでなるべく連れて来られると良いですね、と。予約ですので診察が少し先になりますから、なるべく先にしないようにしていますけれども、それだけに予約電話をもらった時が始まりだと意識するようにしています。

このような対応を不十分ながら意識する流れですが、自己認知の支援という点が、どのレベルで自己認知というふうに規定するかは別として、慎重に時間かけてやっていくという事と、その子がやはり信頼できる人を作っていく、自分のことを話せる人(関係)を作っていく、できれば親御さんになっていただきたい。でも、そこに限度がある場合もあります。親御さんの考え方などもありますし、これも一概に言えないのですが、時間かけて作っていく覚悟が必要なのだろうと思っています。答え(正解)は出ない課題だと思っています。

<信頼関係を築いていくうえで大切なこと>

石川 高橋さんのところも桑原さんのところも、ひょっとしたら鈴木先生のところもそうかもしれませんが、何らかご本人やご家族が、ご自身に何らか特性があるかもということの段階を経てご相談にこられているのだと思うんです。

きっと会場に来ていらっしゃる多くの先生方や支援者の方はもしかしたら、そういうことではないかもしれない。わかっていてくれたら繋げやすいんだけど。でも、ご本人もご家族もう気づいているのか、触れられたくないのかわからなくて、でもこのままだと、この子は学校を卒業した後に困っちゃうかもしれない。という、大人心ですか。もあって、どんなふうにご本人が、自分のことも肯定的に気付いていければいいか、そのところに思いを寄せていらっしゃる方々も多いのではないかと思います。

今、鈴木先生から、一つ信頼できる人になろうよというメッセージをいただいたかと思います。皆さんはどうでしょう。ご自身のとても切ないこととか、触れられたくないことを、誰かに話すことができるだろうか、もしできるとしたら、どんな人に、私たちは話ができるんだろう。信頼ができるということは、一体、どういうことを指しているのだろうか。

ぜひ高橋さんと桑原さんに、これまでのご経験の中で、信頼関係を築くために大事にしているようなこと、

さっき鈴木先生が慎重にと話をされました。お互いに信頼関係を築いていくのに、何か大事にされていることがあったら教えていただきたいと思います。

高橋 日頃取り組んでいる中で、ひきこもりの支援の方、制度外での支援をやっている中での気をつけているポイントにもあるのですが、安心感と信頼感というようなところで、そういったものをより本人が感じやすいように一番心がけていることは、本人、まず話を聞く傾聴。しっかり本人の話を聞くっていうことと、本人に対して興味があることをしっかり伝わるような形で、それを積み重ねていくようにしています。

なので、本人に会える時もあれば、電話だけの時もありますし、手紙でのやりとりだったり、メールでのやりとりだったりいろんなケースが私の場合だと関わりの中で出てくるんです。その時に必ずその前回お話しした内容のものを必ず話題の中に入れてたり、本人から出てきた内容に対して、興味を示すという、その本人に対してしっかり関心があるっていうのを伝えられる関係になっていくことを意識してやっています。

桑原 ご本人がある程度自覚を持って、相談という形に来るのであったとしても、どういうことに困っているのか、その辺よく聞くこと、最後に来てよかったな、吐き出せてよかったなとか、興味関心のあることも聞いていくので、興味感心の話ができてよかったなあ、次も来てもいいかなと思ってもらえるようには心がけています。

というのも、相談が二、三ヶ月ごとで、頻繁でもないのに、そうやって努力しても、すっかり忘れられてしまうこともあります。1回の面接で、本人が少しすっきりし、満足して帰れるようになるといいなと思っています。トラブル問題があって親に言われて来た人には、よく来てくれたねと、言われてきたたけども来てよかったよと言ってもらえるよう心掛けています。

親との関係が悪くなっている場合、別々に話を聞いて不満とかを吐き出してもらい、続きが聞きたいので、次回も来てくださいと関係をつないでいきます。

発達障害者支援センターという名前の場所であるけれども、自分はそう（発達障害）だと思ってないけれども、まあ話に行くかなと思ってもらえるようにと思っています。話を聞く中で、こういうところ苦手だねといった話をしていけるように、最初は関係づくりをしたり、面接の時には本人にとって、楽しいことを聞いたり、質問には、真摯にこたえられるように心がけています。

石川 鈴木先生は、どんなふうに、

鈴木 すみません、信頼などという抽象的な言葉を使ってしまいました。今、お二人の方のお話で具体的な流れがわかるかと思うのですが、最終的には聞いてくれそうだと思う関係、さらには、わかってくれそうかもと思ってもらえるように徐々に変容していくのだと思うのですが、そうした過程を期待したいですね。

私の場合、小さい子や小学校低学年の子に出会うことも多いので、まずは、例えばお母さんにそういう事を聞きますよと電話で話しておきます。来院された時に、「何年生」と聞くわけですが。多くの場合は簡単に答えてくれますが、その答え方もさまざまですね。1とか、中1ですとか、小1ですとかです。続いて「何か困る事あるかな」とききます。「ない」という子がけっこういます。あるいは「話したくない」と言い張る。

私の所ではプレーに繋げる事しているので、「じゃあお母さんに連れて来られちゃったの」「連れてこられちゃったんだね」と。大笑いすることもあって、「そうです」とうなずいてくれる子もいます。

そこで、関係作りが始まるわけですが、「お母さん（お父さん）に話しを聞いてもいいかな」と、断ります。ノーという人はいないですね、答えるのをパスしたいからかもしれない。「その間、お兄（姉）さんがいるから、遊んで待っていて」と言うとき喜んでADHD系の子なんかは紹介される前に部屋から出ていきます。「ちょっと待って、紹介するから」と繋いで、関わる様子や遊ぶ様子を見させてもらいます。

もう少し年齢が上で、やがてカウンセリングに繋がっていく場合もあります。目標は何かというと、社会生活の中で、あるいは家の中で抱えた不安な事態、その人にある種、危機が生じたわけですが、危機そうした事態においてはSOSを出せるというか、発信できた方がいいわけです。

できれば、言葉で発信して欲しいわけですが、発信できるため力にハンディがあるのが特性のまた難しさでもありますから、トラウマ体験も含め簡単には目標とは言えない面もありますけれど、ある程度その力があるとすれば、聞いてくれそうと思える相手がいないと、当然、発信する気にならない。

問い詰められる対応とか、例えば、不登校状態だと周囲の方々が不安になっている、先々どうになってしまうのだろうという心配が強い状態です。すると本人の症状や問題な行動の要因としての不安、さらにその背景となる不快、不本意体験には相談に乗れなくなる、つき合えなくなってしまう。本人は孤立するわけです。

となると本人は、抱えた不安を一人で抱えていくしかなくなってしまう、不安をうまく言葉で発信できない事態が続く。我慢しがちな人は症状が出てくる、症状として発信される。学校に行こうとはするが頭が痛い、夜眠れない、自分はどうせ駄目だと。不安を抱えて戦いモードになりがちな場合もあり「絶対行かない」とか、周囲が行かせようとしたと感じただけで攻撃するとか。難しい問題行動が出がちなものもいます。

どちらも困るので、社会生活という点では、自分の不安に関連する事を誰かに話せる力をその子に育てる、つまりは話せそうな人を自らも含め繋げていく、作っていく、仕事という課題に出会った時にも、皆様がそうした関係作りを意識しながら対処なさっている事と少し通ずるかなと感じています。時間的限度も含め、私の領域では不十分ですし、年齢が上にいくほど複雑で簡単ではないはず、今日は興味深く話を伺いました。

<この場にいない支援者に向けた一言とは>

石川 はい先生ありがとうございます。

鈴木先生たちの所に子供たちがたくさん大挙しているのを知っておりますので、どれだけ先生のところが、安心できる場所かというのは、多くの方が知っていることかと思えます。

では、そろそろ時間になりますので最後そうですね一つ皆様にお聞きしたいこととして、この場に来てくださった皆様は、きっと先生方からお話を聞いてたくさんヒントをいただいたかと思えます。高橋さんと桑原さんをお願いしたいのは、ここに来ていらっしゃらない方に一言、お伝えしたいことがあれば、思いのたけを話してください。

そして、それをこの場にいらっしゃる皆様には、ご自身がヒントとして得られたものと一緒に、高橋さんと桑原さん、鈴木先生も最後お願いしますね。皆さんの一言をお持ち帰りいただきたいと思えます。

高橋 なかなか難しい。ですけど、そうですね。

実際、私たちの障害福祉サービスの方で職員とかに、私の方でよく話をするのは、あんまりこう、いろんな課題だったりとか、いろんなことを進めようと難しく考えずに、もっとシンプルに物事を見て、意外とその人の抱えている問題というのは、シンプルだったり、そういうところが、大きかったりするのかなっていうのがあったりするのです。

やっぱり、先ほどの話じゃないですけど、まずは話を聞いていく。しっかり話を聞くということを大切に、して欲しいなというのが、ここに来てない方でもし伝えられることとしては、まずお話を聞いてみてくださいということ、お願いできればと思います。

桑原 相手の方に向き合うということは大切です。皆さんに特性を広く理解をしていただいて、発達というフィ

ルターをかけながら見て、理解を深めていただきたいと思います。

皆さんもご承知かと思いますが、発達特性による得意、不得意で、得意な方をいかせば、本人の「できた」が増えますので、その視点で関わり、ご本人の力に変えていただけるといいと思います。特性についてご理解いただいて、支援に役立てていただけるとありがたいです。

鈴木 特性という概念が今日テーマになっていますが、特性は個性と言えれば個性です。ただ個性と片付けるわけにもいかない程度ということです。かといって、特性イコール障害という事ではなく、環境との絡みで、二次的に対処困難な状態が生ずると、そういう特性の「診断」名をつけるのです。

でも、二次的な問題だけ取ると、不安症であったり、うつ状態であったりという状態なのです。でも、それが生じている主因が特性であると、その方の持ち合わせた個性であると、個性として変えられない一面を特性と見ているわけです。でも変わりうるというか、その表現系は変わり得るわけです。

元々の持ち合わせた一面は簡単に変えられない。知的能力や身長を変えられないのと同じようにです。ただ必ず環境との絡みで生じた、その人おける不安体験、不本意体験が絡んでいるので、そこは、皆さんが話してくれたような、聞いてくれそうな人がいて、わかってもらえそう、わかってくれたと思える体験がものすごく重要で、そうすると、元々の特性は意外と軽度かもしれないのです。例えば、就労が課題となるまでやって来られたということは・・・、特性が重度の人はもっと別の意味合いでの難しさを持つのですが・・・

今日のテーマは主に就労というところであるとすると、軽度から中等度の特性、個性を持つ人ということで、その意味では、話をすれば聞いてもらえとか、話しても良いと思える体験が重要なのだと考えます。

でも一人の先生が何十人も相手にする小中学校時代は、何かあったら言ってきてというメッセージは「皆がやっているのだから」「もっとちゃんとやって」というようなメッセージに変わってしまうのです。

一人一人の個性というか特性を配慮していると集団崩壊になりかねないという現実もありますし、そういう意味では、ぜひ1人の先生の担当の人数が少しは減る、或いは、副担任がいてくれて、フォローしてくれると違うはずです。また、カウンセラーが常駐してくれるようなシステムができると良いと思っています。

当面できることとしては、じゃあその子がいえる相手は誰かといったら、日常的な家族の中でいてくれると一番ありがたい。でも、家は感情問題になり易い場でもあり、難しいのですが・・・ここで聞いてくれそうなお母さんお父さんの余裕が必要なわけで、私はそこを保障するにはやはり、愚痴を聞くところから始めないとうまくはいかないだろうなと思っています。

幾ら理想的なことを言っても、今日の皆さんの話、愚痴まで含め聞いているような関係、時間を取っていると感じられます。医師という立場では限度があるので私は心理の方にそれをしてもらっていますが、小一時間、愚痴を話さないとはやはり気持ちが晴れない、納得には至りにくいと考えます。そういうことをしながら、だんだん変化していくことを期待していくしかないのかなというふうに改めて感じさせられました。

近くにいる人が、どのような場合も、せめて聞き役になって欲しいなというのがメッセージですかね。

<まとめ、私たち一人一人の考え方で社会の価値観は決まっていく>

石川 では皆様、予定の時間がそろそろ終わりを迎えます。

一部の方はいかがだったでしょうか。3人の皆様からいろんなお話を聞かせていただきました。

今の生活をより良く充実させていくために、しっかりと話を聞いてくださっている発達障害者支援センターの桑原さんもいらっしゃいました。

多様性ということ、どう対応していくかということで、本当にここまで学びの世界が、多様性に対応でき

るようになったかいうのを、須永先生の方からも教えていただきました。

坂爪さんからも、働き方だとかご自身の自己意識というものの、とても丁寧に、丁寧に聞いていくことが必要だということも教えていただきました。

後半は、高橋さんからもう圧倒される本当にすばらしい価値ある支援をしてくださっていらっしゃるのを、教えていただきました。

最後に、社会的自立に向けて私たちがどんなことをしていけるのか。自分というものを理解していく上で、どんな支援ができるのか。そういったことも教えていただいたかと思う。

今日のテーマの一つであった、社会的自立です。

それは、社会、自分を含めた2人以上の集まりの中で、自分のことに責任を持って行動し、合意を形成していくことだ。こんな定義づけがあったかと思います。

自分のことに責任を持って生きていくというのは、どういったことなんだろう。自分のことが嫌いで、自分のことは駄目だと思っていたら、私たちは責任ある行動を取ろうと思うだろう。自分のことなんかどうでもいいやって思っちゃったら、自分のことも、周りのことも、大事にできないかもしれない。

私たちが、いろんな人との関わりの中で、責任を持って、行動ができるというのは、やっぱり自分のことを大事にしてるからだと思います。自分のことが好きだったり、大事にするからこそ、今生きている社会も大事にできるかもしれません。そういう意味では、自分のことを肯定的に見える、見せてもらえる、そんなこともとても大事かもしれない。自分の良さに気づいて、そのきっかけは自分だけでは難しいから、誰かとの話の中で、気付いていけるということも、大事かもしれない。

そして合意形成です。合意形成というのは、鈴木先生おっしゃられたように、聞いてくれる人がいなければ始まりません。自分が話し、相手が話していることを聞いて、どこかで着地点を見つけていくのが合意形成です。そう考えるのであれば、ここにいる一人一人が聞ける人になるかもしれない。でも、もし、私たちの中に、不安があったとしたら、私たちは目の前にいる人の話をじっくり聞けるだろうか。

そんなこと言っていたら、いつまでたっても自立できないんじゃないか。私たちはつい頭の中をよぎるかもしれません。もし私たちが話を聞けないなと思ったら、私たちの中に何か不安があるかもしれない。

それは鈴木先生が聞いてくれました。チーム仕事をしていくというのはそういうことが大事なのかもしれません。私たちが抱えている不安は誰かに聞いてもらっていいかもしれません。

そして最後に一つだけあるお話をさせてください。

ある方が、保護者の方にこう話しました。感覚過敏がある。聴覚の過敏があるお子さんをお持ちのお母様です。そのお母様に支援者がこんなふうに励ましました。お母さん大丈夫よ、この子だって成長するんだから。きっと慣れてくれば、今は付けているイヤーマフも取れるようになるよ、大丈夫だよ。心配しないでこんなふうに励まされている方がいました。

もう1人の支援者は、お母さんにこんなふうに話します。お母さんこの子にとってイヤーマフというのは、とっても大事な自分の身を守る大事なツールだから、必要な時に使えばいいのよ。

皆さんは、この2人の支援者のお話をどう受け止めるでしょうか。

つつい何かができるようになったり、進学したり就職できたり、よかったね。となった時に、私たちはつつい前者のようなことを話してはいないだろうか。イヤーマフがいらなくなる。感覚過敏はなくなる、そう期待しようよ、特性がなくなることを期待しようよ。こんなメッセージが含まれているかもしれない。

これから、子どもたちもそうですが、若者たちが生きていく社会。その社会の価値観を作っているのは、私たち一人一人の考え方です。私たち一人一人の考え方で、社会の価値観は決まっていきます。

社会的自立、子どもたちや若者たちがこれから生きやすい社会になっていく価値観を作っているのは、私た

ち一人一人かもしれません。どうぞこの場にはいないかもしれない子どもたちや若者、或いは、すごく困難を抱えている大人たちが生きやすい。そういった社会を私たち一人一人が作れるかもしれないと思って新しい年を迎えたいと思います。

皆様ちょうどお時間になりました。最後まで聞いていただきありがとうございました。

そして、ご発表いただいた4人の方々、そして鈴木先生もありがとうございました。

今一度皆様に、そしてご自身にも拍手で終わりにしたいと思います。

皆様ありがとうございました。